

## 各地の話題 —福岡県における植物防疫業務の取り組み—

福岡県病害虫防除所 梶谷裕二

福岡県は、九州の北東部に位置し、本州と九州を結ぶ交通の要衝にあり、4,974km<sup>2</sup>の県土に約505万人が暮らしています。アジアの交流拠点を目指す本県は、アジアとの地理的・歴史的に深い関係を活かして新しい連携を築くとともに、本県の有する優れた人材、技術、資源を最大限活かしながら、先端半導体、自動車、バイオなどの次世代をリードする産業の育成を進めています。また、県内の農産物のブランド化や知的財産戦略を推進し、国内はもとより海外への積極的な販売戦略を展開しています。

このような中、平成20年度には戦後最大といわれる県庁組織の見直しが行われ、農政部と水産林務部が統合され農林水産部となり、新しく農林水産物安全課が設置され、農林水産物の安全対策や植物防疫業務を行うこととなりました。病害虫防除所が試験研究の病害虫部門と兼務する県が多くなるなか、本課の出先機関である当病害虫防除所は単独で設置され、本所は予察課と指導課からなり、この出先として筑後支所と行橋支所が設けられています。予察課では病害虫の発生予察事業を中心に、薬剤感受性検定、病害虫診断、IPM技術確立実証事業等の防除対策業務等も行っています。指導課では農薬の安全、適正使用の指導等の業務を担っています。農薬販売業者に対し講習会や立入検査を実施するとともに、JA生産部会、直売所及び青果市場などの農薬使用者に対して啓発活動を行っています。特に、一昨年に施行されたいわゆるポジティブリスト制度の周知と農薬の飛散防止対策の徹底を図っています。

近年、地球温暖化や農作物栽培の多様化等により、病害虫の発生が早期化・長期化する等、発生様相が変化しています。水稻のトビイロウンカ、果樹のカメムシ類の発生予察、イチゴ炭

そ病及びナシ黒星病等の難防除病害虫の発生状況把握に精力を注いでおります。例えば、水稻ではJPP-NETのウンカ飛来時期予測モデルの下層ジェット気流グラフを使用し、中国大陸等からの海外飛来性害虫（ウンカ類）の飛来時期の予測、果樹カメムシ類では、越冬虫数や増殖源であるヒノキ球果における口針鞘数等のデータから、本虫の果樹園内への飛来時期の予測を行う等、発生予察精度の向上に努めているところです。近年、果菜類や花き類を中心に難防除病害虫や原因不明の生育異常症状が増え問題となっています。特に、果菜類ではミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病やタバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病及

びキュウリ退緑黄化病（仮称）等の発生が増加しています。当所では年間約600件の病害虫診断を受け付け、ELISA法やRIPA法及び遺伝子診断法等も駆使し、迅速かつ精度の高い病害診断を行っています。また、薬剤感受性の低下も見られることから、各種ウイルス病の媒介虫であるタバココナジラミパイオタイ

プQの薬剤感受性検定等を実施し、充実した防除技術情報の発信に努めています。また、近年、ミナミアオカメムシ等の南方系害虫が本県まで北上してきました。昨年は、本虫による水稻の斑点米や大豆の吸汁害が多発したことから、水稻の防除体系を見直すとともに、今後は大豆の防除体系についても見直しを検討しているところです。

気候の温暖化が進んでいる現状から、今後も南方系の病害虫が問題となる可能性が高くなることが考えられます。病害虫の発生動向に絶えず気を配り、精度の高い的確な発生予察や防除対策の情報を発信できるように心がけています。



福岡県病害虫防除所